

# 古写真に見る 名も無き庶民 -その生活史

## (第6回 昭和2)

1 塚 保 (れとろぎゃらりい柳心庵 代表)

### 戦争と若者・子供たち

前回に引き続き、終戦に至るまでの昭和前期の庶民生活の断片を古写真でさらに追ってみたい。今回の稿では、青春期を国家と戦争に捧げざるを得なかった当時の若者と子供に焦点をあててみよう。

#### 息詰まる戦争前夜にまけない 若い女性のファッション



[高等女学校の学園祭から (昭和13年頃)]

にいるハイカラ少女は、それぞれ「モダンボーイ」「モダンガール」のペアではないだろうか。現代の女子校学園祭と異なる点を敢えて挙げるとすれば、ここで「軍人」の扮装が混ざっていることだろう。やはり時世が時世だったのである。

若い女性がファッションに憧れを抱くことは昔も今も変わらない。

これは高等女学校の生徒がめいめいの趣向に合わせて手作りしたらしい扮装での記念写真である。「ベルバラ」風の2人組は少女歌劇団の熱狂的なファンだったのかもしれない。そしてこの2人の「ベルバラ」少女の間にいる帽子の男装少女と「軍人」風の2人の間

しかしながら、「運命の日」(昭和十六年十二月八日)の真珠湾攻撃開始以前だったので多少の「軽佻浮薄な欧米風」であっても当局からは大目に見られたのだろう。

また、一応国策に合わせて「軍国スタイル」も取り入れているので学校当局も承認したと思われる。丁度このあたりから国中が熱病に罹ったように、「大東亜聖戦」「尽忠報国」「皇軍勝利」「進め1億火の玉だ」など勇ましい標語が街中にあふれ始めたのである。

それと同時に、日本全体が窒息するような監視社会になり始めていた。治安維持法で軍・政府への異議申し立てを厳罰で封殺し、国家総動員法で人々を戦争遂行に駆り立てるとともに、軍事への一方的な隷属を強要したのである。

そのためには政府機関だけではなく、国中に網羅された各種の御用団体がこれらの機能をフルに果たしてゆくことになる。(大政翼賛会、在郷軍人会、大日本産業報国会、大日本青少年団・青年学校、大日本婦人会、町内会・隣組などなど)

### 学生の軍事教練

また、中学校以上の各種教育機関には既に大正末期から学生を軍事訓練(これを学校教練または軍事教練と呼ぶ)するための配属将校が常駐していたが、太平洋戦争の頃からはこれが1段と強化拡充されてゆく。この写真はこの時期に、或る高専の学生たちが軍事教練を受けた際のスナップである。学生帽に巻脚絆、訓練銃を持って緊張した面持ちなのだが、ある種の痛々しさを感じるのは何故であろうか。



高専学生の軍事教練風景  
(昭和15年頃)

### 生徒にも愛国心教育が



「愛国行進曲」を演じる児童たち (昭和13年)

おかっぱ頭が愛らしい5歳~10歳くらいの少女たちの演じる「愛国行進曲」の演舞である。主催はおそらく陸軍省か内務省あたりであったと思われる。これら幼い子供たちも「愛国心発揚」のために「少国民」として動員され始めた。

昭和16年には小学校が「国民学校」となり、「体錬科」と称する擬似軍事訓練が導入され、幼少時から一貫して軍国主義精神を叩き込まれることとなった。

### 戦争に狩り出される婦人たち

昭和17年、太平洋戦争の拡大に合わせて、以前から別個に活動していた愛国婦人会、大日本国防婦人会など3婦人団体を統合して、新たに「大日本婦人会」が発足した。

国内の全ての婦人を進行中の総力戦に動員することが目的であり、20歳以上の女性は事実上、強制加入であった。戦時統制がいよいよ婦人層まで深く浸透していくこととなった。

奉仕活動として戦場兵士への慰問袋等の調製・送付、防空消火訓練などともに、時にはこのように「国防ニ必用ナル訓練」として軍人の指導による実弾射撃訓練までさせられることもあった。

もっとも、戦争最末期にはあらゆる兵器類の欠乏により、このような訓練銃までが払底した。ゆえに女性を含む「銃後」の国民は「本土決戦」に備えて竹槍の刺突訓練までさせられる羽目となる。戦時下とはいえ、とても正気の沙汰とは思われない。狂気が「正常」としてまかり通る、まことに不可思議な時代を人々は生きなければならなかったのである。

大日本婦人会 射撃訓練風景  
(昭和17年頃)



### 軍用2輪車とオートバイ青年たち



整陸軍整備兵・側車付軍用自動2輪車(昭和)

作業服を着た陸軍整備兵たちに囲まれているのは、日本陸軍が米国ハーレー・ダビッドソン社製に独自の技術改良を加えたサイドカー付軍用オートバイである。どの顔も1様に若い。20歳代半ばであろう。気のおけない仲間同士らしく、いかにもリラックスしたポーズである。1目でわかることは彼らがこのオートバイが好きでたまらず、その備に誇りと喜びを感じていたであ

ろうということである。

彼らを見ていると、戦後から現在までのオートバイ好きの若者群像とオーバーラップしてしまう。元気いっぱい若者であれば、誰しも一度はカッコいいオートバイで疾駆する自

分を夢見るものである。この若者たちは無事、戦争を生き延びたのであろうか。

そして終戦。



戦後数年間の混乱期を経て、人々がやっと平穏な生活を取り戻した頃の、或る動物園での光景である。豊かさとは程遠い、日々つましい生活ではあったが、未来への明るい希望が人々の心の中にしっかりと息づいていたことが、この母子の姿からも伺い知ることができよう。

それにしても、足に鎖を付けた

或る動物園での光景（昭和29年頃）

だけの象が母子のすぐ後ろをノソノ

ソと歩き回る姿は、現代から見ると奇異に感じるかもしれない。今日ならこういう動物園があればたちまち警察、行政当局、P A、近隣住民、マスメディアその他大勢が大騒ぎし、寄ってたかって袋叩きが始まるであろう。現代のように異常に過保護ではなく、おおらかな良き時代だったのであろう。

## 連載を振り返って

### 古写真からは貴重なメッセージが

以上、全6回にわたり、幕末・明治開国から終戦後までの庶民生活史を古写真をもとに断片的にたどってみた。筆者個人としての集約であるが、これらの古写真からは単なる懐古趣味では済まされない様々な貴重なメッセージが読み取れるのではないかと、思うのである。

### 品位に満ちていた原日本人の顔

たとえば人々の顔である。戦前、特に幕末・明治期の人々の面相は身分年齢性別に関係なく、ある種の品位が漂っていたように思う。かつて小泉八雲など西洋人を魅了した原日本人が持っていた慎み深さ、正直さ、忍耐力、自然や他者への繊細な優しさなど、自然原石のような数多くの美德がその実体であったのではないだろうか。

これに対して、我々現代日本人が対抗できるものはあるのだろうか。

筆者自身を含めて、現代日本人は「利害損得の計算」「自己防衛と猜疑心」「絶えざる不安と緊張」などを恒常的に強いられている。なぜなら、そのような「卑しい損得勘定」

を捨て去ると、きわめて生きにくい社会構造となっているからである。当然ながら、そういう「卑しい」メンタリティは我々の面相に直接影響を与える。

したがって、大方の現代日本人はこのような恒常的な精神的ストレスにさらされており、もはや原日本人の品位ある風貌を見ることはごく稀となるわけである。

むしろ「発展途上国」の人々の屈託のないナイーブな表情の中に、我々の祖先の顔をダブらせてしまうのは筆者ひとりであろうか。

破綻しつつある英米流の強欲マネー資本主義の暴走の結果、我が国の社会・経済システムがかなりの重傷を負っていることは指摘するまでもないが、何よりもそれに伴う人々の心の荒廃が気にかかる。気がつかないうちに失ってしまったものは数多くあるが、心の問題はその最たるものではないだろうか。

## 地方自治、伝統文化を根付かせて

誤解されないよう願うのだが、明治維新以前の封建期にはそれなりに存在していたある種の「地方分権」「地方伝統文化の尊重」を民主主義の現代に最適化させた形で復活させることが重要ではないかと思うのである。

明治維新以来の官僚制中央集権統治システムが制度疲労しており、動脈硬化に陥っているのは誰の目にも明らかであろう。これに代わるマトリックスに成り得るものとして、健全で強固な統治機能を備えた地方自治体による連邦制も、ひとつの選択肢であろう。いずれにせよ、地方を大事にしない国は栄えたためしがない。